

〔著書紹介〕

B. グレトウイゼン著
金子晴勇・菱刈晃夫訳

『哲学的人間学』

知泉書館 2021年



本書は、Bernhard Groethuysen : *Philosophische Anthropologie*, 1931. の全訳である。翻訳の底本としては、1969年の復刻版を用いた。ちなみに著者自身の手によって1952年にはフランス語に翻訳され、翌年に出版されている。

グレトウイゼンについては、すでにフランス語からの4冊の邦訳がある。『ブルジョワ精神の起源 — 教会とブルジョワジー —』（野沢協訳、法政大学出版局、1974年、原著1927）、『フランス革命の哲学』（井上堯裕訳、法政大学出版局、1977年、原著1956）、『神話と肖像』（金井裕訳、国文社、1977年、原著1947）、『ジャン=ジャック・ルソー』（小池健男訳、法政大学出版局、1978年、原著1949）。彼はディルタイ門下の文化哲学者で、フランス啓蒙思想を主要な研究対象とした。1880年ベルリンに生まれ、ウィーン、ミュンヘン、ベルリンの各大学に学び、特にディルタイから決定的な影響を受けた。1931年にベルリン大学の教授となったが、ナチス政権樹立後フランスに亡命し、ガリマール書店のスタッフとなり、在野の学者として活動し、1946年に歿した。

ここに訳した『哲学的人間学』はベルリン大学教授時代の著作であり、『ブルジョワ精神の起源』に続く作品である。グレトウイゼンのドイツ語著作からの初訳であり、5冊目に当たる。論述のスタイルからしても大学での講義ノートを基とした作品である。わたしたち読者もしくは学生を、ディルタイ譲りの「生の哲学」によって読み解いて解釈した原典へと誘うため、ここには本文の他にも膨大な注記が含まれている。とりわけ出典箇所についての記載については、現代日本にいるわたしたちの力量では多くの参照資料の出典を特定できないが、原著のニュアンスを生かすためにも煩雑を承知のうえで、一行空けて区別しながら全部を

訳出した。この注記の部分は本文に劣らず重要な内容がその出典箇所とともに提供されているからである。

すでに『ブルジョワ精神の起源』のあとがきでも述べられているように、グレットゥイゼンが師ディルタイの教え(生の哲学)を、すぐれた思想史家としても自己の仕事に血肉化した様子が、本書からも読み取れるであろう。とくに日本には哲学的人間学の歴史研究があまりなされていないので、これからの個別研究に役立つと文献として、参照していただければ幸いである。

ただし思想史研究においてもっとも重要なのは、言うまでもなく原典そのものの読解にある。近年では、そうした地道な努力が大学でも相当おろそかになってきている。人文学の未来が大いに危惧されるが、本書がそうした潮流に少しでも抗えればと願っている。以下に目次を掲げておく。

第1章 序論

第2章 プラトン

ソクラテスの姿

ソクラテスと人間たち

哲学的な生活

神話的人間

政治的人間

両方の人間学的類型

ソクラテス以後の登場人物

第3章 アリストテレス

類的存在としての人間

人間的な形態

人間的な生命の輪郭

人間と自然

生の訓練

人格性の問題

第4章 ローマ - ギリシア的生の哲学

新しい人間学的な立場

人格性

第5章 プロティノス

人間と魂

神話的人間とその運命

第6章 アウグスティヌス

生きることへの意志

意志の妨害

病める人間

人間の国

人間と世界

宗教的な人間

新しい人間類型

第7章 近代の人間学の基礎

人間の自己体験 ペトラルカ

ペトラルカ, ボッカチオ, ルネサンスの生命哲学

第8章 神話的人間——魂と世界

フィチーノとピーコ・デッラ・ミランドラ

ポンポナッツィ

ルネサンスの人間

神話的人間学の崩壊

虚構と現実性

補遺 フランスにおける神話的人間

第9章 宗教的人間

神話と信仰

ニコラウス・クザーヌス

パラケルスス

ルター

此岸と彼岸

宗教的なわたしとルネサンス人

第10章 人文主義的な人間

エラスムス

モンテーニュ

自分自身への人間の逃避

第11章 近代における人間学的な見方のさらなる形成に向けた展望

蛇足ながら本書が出版されるまで、およそ10年近くもの月日が経ってしまっ
た。ひとえに訳者(菱刈)の怠慢によるものであるが、このたび敬愛する金子晴勇
先生と共訳書が上梓できたのは感慨深い。『ルターの人間学』を読んで、本格的
に宗教改革期の教育思想研究に誘われた私にとって、およそ35年後に金子先生
との共訳書が、このような形になるとは夢にも思っていなかった。毎朝5時に起
床して最低でも1時間は翻訳をする、というライフスタイルを教えて頂いたのは
金子先生からであった。毎日地道に研究を継続し、それを文字にするという、研

究者として当たり前な態度を、金子先生からは身をもって示して頂いた。今はメランヒトンの『神学総覧』(Loci praecipui theologici, 1559)の全訳出版に取り組んでいる。メランヒトン思想の総まとめともいえる大作であるが、何とか早く完成させたい。

翻訳者

菱刈晃夫(ひしかり てるお・教授)